

題目 カテゴリーに対する信頼とネットワークに対する信頼の比較研究

氏名 樋口由香

指導教官 結城雅樹

本研究の目的は、相手と社会的カテゴリーを共有しているという情報、相手と対人関係のネットワークを共有しているという情報にもとづく2つの信頼が、それぞれどのような構造を持つのかを比較研究することである。

山岸(1998)は特定の相手に対する情報に依存する信頼を「情報依存的信頼」と位置付けている。本研究で調査する信頼は、この中でも「社会的カテゴリーの共有」、「対人関係のネットワークの共有」という情報に基づいたものである。Coleman(1990)は直接相手の人間性を知らなくても、信頼できる媒介者の存在によって、信頼が拡張し得ると述べた。ここから対人関係のネットワークを共有しているという情報によって、相手を信頼する可能性が示唆される。そこで、本研究では、対人関係を共有している相手への信頼と、知人の知人であると知覚する程度との関連を検討した。また、Brewer(1999)は、人々は内外集団の区別を認知すると、内集団成員が信頼できると感じるとした。この主張に基づき、本研究では社会的カテゴリーを共有しているという情報を経由した信頼と集団へのアイデンティティとの関連を検討した。また、Yuki & Brewer (1998)が提案した、自己概念と集団表象の組み合わせによる2つの認知プロセス―「自己カテゴリー化プロセス」と「ネットワークプロセス」によってそれぞれ、「カテゴリーに対する信頼」と「ネットワークに対する信頼」の心理的説明が可能である。彼らの、東アジアでは“ネットワークプロセス”が優勢であるという主張に基づいて、本研究では、日本人は対人関係のネットワークを共有している相手への信頼の方が、社会的カテゴリーを共有している相手への信頼よりも高いと予測した。

これらの信頼を、相手に関する情報を操作した「分配委任ゲーム」によって測定した。この結果、相手とカテゴリーやネットワークを共有しているという情報に基づいた信頼は、これらを共有していないという情報に基づいた信頼よりも高かった。また、この差は相手も自分に関する情報を持った上で分配をしている状況でのみ見られた。また、カテゴリーに対する信頼には、集団へのアイデンティティが影響を与えていることもわかった。しかし、ネットワークに対する信頼に関しては、その規定因を明らかにすることはできなかった。今後は、これらの問題点を改めた上で、比較文化研究に発展することを期待する。